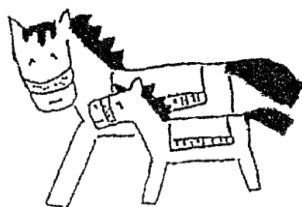


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポッキリ、ポッキリと

25年 2月 NO. 219



(厚生労働省・高松市委託事業)

〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://www4.ocn.ne.jp/~kouma/>

～どなたでも～		2月の主な活動		～お気軽にどうぞ～
2月 8日	金	おはなしの会 10:00～12:00	「本であそぼう」をテーマにことわざ 絵本や大型絵本を楽しみます。	
2月 9日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスに入って みんなであそびましょう。	
2月 16日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も子育て体験に おいで下さい。	
2月 16日	土	木工教室 14:00～16:00	木製品の修理や簡単な ボックスなどつくってみましょう。	
2月 26日	水	健康・育児相談 11:00～12:00	園医師（小児科医）にゆっくり 相談できます。（予約要）	
2月 27日	木	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	和紙でコサージュをつくります。 (材料準備のため、2/9までに予約要。)	

<p>・火～金の13時～16時までは、園内開放していますので、親子でご来園下さい。 (但し、月・日曜・祭日は休み)</p>	<p>育児相談（月～土）9:00～18:00 しつけや子育てについての悩み、保育園生活、入園・見学についての相談もどうぞ。</p>
---	--

香川県高松市御坊町2-2
高松保育園 地域子育て支援センター



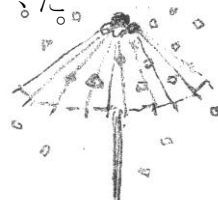
金子みすゞ童話全集⑤
「さみしい王女・上より

歌時計がちんからり、
鳴り鳴り出てった。
消えるまできいてて、
ふっと気がつけば、
霰はとうに止んでいた。

歌時計がちんからり、
お客さんの手で鳴った。
あられの音にまじって、
一つとやを歌うた。
(さようなら)
(はい、ありがとう)

霰がこんころり、
潜在客户が、霰と。
お客さんが、霰と。
お連れになつてはいつた。
(こんばんは)
(はい、いらっしやい。)

店の出来事



「木浦の母」—韓国で3000人の孤児を育てた 田内千鶴子さんの愛（高知市出身）

○児童福祉施設「木浦共生園」

韓国の南西端にほど近い港湾都市、木浦にある
孤児らのための児童福祉施設「木浦共生園」。

故・田内千鶴子さん＝高知県出身＝が嫁ぎ、
“母”となり、守り育て次代に残した“家”である。



田内さんは1928年、行き場のない孤児7人と、
朝鮮人伝道師、尹致浩（ユン・チホ）さんと生活を始め、1938年に尹さんと結婚し、電気もガスもない生活の中で、2人は孤児を育てた。51年に尹さんが食料の調達に出かけ、そのまま行方不明になった後は、田内さんが園長を継いだ。食べ物を集め、服を作り、自身が病に倒れても、「治療費があるのなら、子どもたちの学費に」と願った。

そうして田内さんは3千人を育て1968年、56歳の誕生日に亡くなった。

共生園は今、1～22歳、乳幼児から大学生の72人が暮らす。園職員は23人。

7代目の園長で田内さんの孫、鄭愛羅（チョン・エラ）さん(50)が教えてくれた。

「母（田内さんの長女、清美さん）も園長をしていましたが、そこに卒園生が会いに来ていた。実の親と子でもないのに、そういう関係がいいなと思っていました」

鄭さんの元にも、結婚や就職の報告に来るといふ。

洪朱鎬（ホン・チュヒョン）さん(29)。6歳から18歳まで共生園で過ごした。

「2年ほどして、母は私たちが園にいることを知ったようです。それからは年に1度、訪ねてきてくれました。私は『親を知っている、親のいる孤児（コア）』。園には『生孤児（センコア）』と言って、親の記憶すらない子もいっぱいいました」

現園長鄭さんはこう聞かされている。「朝鮮戦争のころは一日数十人単位で保護されていました」

その後、韓国は次第に豊かさを手にしていく。が、孤児はいなくならなかった。洪さんもその一人だ。

ただ、社会の孤児に対する風当たりは厳しい。

洪さんはこんな体験をしている。2年前ほどのことだ。結婚を考えている女性がいた。が、彼女の両親は言った。「施設育ちと恥ずかしくて、親戚に紹介できない」。結局、彼女とは別れた。

施設で育った人たちは諦めが早い、根性がないという偏見がある、とも感じている。

洪さんはソウルの貿易会社を辞め今年8月、園に迎えられた。現在、14人いる生活指導員の一人だ。



○知的障害者施設「共生再活園」

木浦市の南西部。孤児らのための児童福祉施設「木浦共生園」から、おもちゃのような、海の上を渡っていく高架橋が見える。東西、南北がそれぞれ1キロほどの島、高下島とつながっている。

園から車で20分。その橋を渡り、島に着いた。民家は見当たらない。広がる原野。スキがさわさわと風に揺れている。

青々と草の生えたグラウンドと薄桃色の3階建ての建物が現れた。知的障害者施設「共生再活園」。ちょうど食堂に20人ほどが集まって、昼食を取っていた。わかめスープをすくうスプーンが止まり、笑い声が広がる。

その輪の中に園長の姿があった。故・田中千鶴子さんの次女、睦子さん(65)。母と同じようなその職に就いて12年になる。

もともと知的障害のある人々も共生園を利用していたが、人数が増えたことから1984年に開設。現在、職員50人で食事や洗濯といった生活サービスやリハビリ指導などを行っている。

利用者は9~60歳の120人。共生園の寮のように、14畳ほどのリビングがある3LDKを一つの“家”として、10戸に分かれて暮らしている。「10代の子も50代の人も交ざりません。まるで“家族”のように」と睦子さん。

○職業訓練校「市立中部技術教育院」



ソウル市の中心部にある市立中部技術教育院。納税額の少ない人を優先的に入学させる職業訓練校だ。学費は無料。今も15歳以上の同市民、約1400人が学んでいる。コースは美容、ファッションデザイン、調理など9科。半年から1年半かけて技術を習得し、社会へ巣立つ。

運営しているのは崇實(スンシル)共生福祉財団。故・田中千鶴子さんの長男、基さん(70)が名誉会長を務める韓国の社会福祉法人である。

基さんと訓練校の関わりは1977年から。57年に同市が設立した10代の女性たちが学ぶ職業訓練校の運営を、10代男性のための施設も合わせて基さんが受託。初代校長となった。

念願にあったのは当然、孤児たちのことだ。基さんが振り返る。

「(田内さんが守り育てた)木浦共生園を出ても社会に受け入れられず、園の前をうろうろしている人たちがいた。(母と園で暮らした)10代の時も、園長を継いだ20代の時も。そ

んな人たちの『技術を教えてもらえれば』という声を聞き、立ち上がらねばと思った」

職を失って共生園に戻ってきた人に、訓練校で洋裁や美容を学ばせた。やがて園の前でうろうろする人はいなくなった。

孤児だけではない。貧しい家庭の子も無料の寄宿舎に住まわせながら、技術を身に付けさせた。入学年齢の上限も「55歳まで」だったが、今年3月からはそれを撤廃した。

そもそも「母の願いは、木浦共生園を出る子たちに、手に職を付けることだった」と基さんは言う。

日韓の草の根の絆を強く

竹島問題をめぐり急速に冷え込んだ日韓関係に春風が舞い込んだかのようだ。

韓国の木浦市で孤児3千人を育てた“木浦の母”こと故・田内千鶴子さんの生誕100年を記念し、出身地の高知市と木浦市が平成24年11月に友好交流協定を結んだ。

各地で交流行事が中止や延期となる中、両市が未来志向の絆を強めたことは両国関係にとって大きな希望といえる。変わることなく日韓の懸け橋であり続ける田内さんに感謝し、その功績を永く後世に伝えたい。

偉大な足跡をしのぶため、田内さんの誕生日の10月31日の前後に生誕100周年記念行事が、韓国と高知市でそれぞれ両国の関係者が参加して行われた。

竹島問題が決定的なダメージとならなかったのも、田内さんの存在が日韓の懸け橋そのものであり、今も木浦市民の尊敬の対象であり続けているからだろう。

友好交流協定の終結で、教育や文化、経済など幅広い分野で交流が進められることになる。終結式での懇談では、木浦市の丁鐘得市長から「両国の心を合わせることで田内さんの精神を維持すること。100年続く交流にしたい。」という意欲的な言葉も聞かれた。

今後も歴史認識をめぐり、両国関係がぎくしゃくすることもあるに違いない。その場合も未来志向で乗り越えられるよう、市民レベルの交流を絶やさないことが重要だ。

大勢の孤児を育てる一方で、田内さんは「孤児のいない社会」を願っていたという。長男の基さんは母の遺志に応えるため、国連に「世界孤児の日」の制定を求める活動を続けている。

豊かな国となった日韓両国でさえ、親の愛に代わる共生園のような存在を必要とする子どもたちは大勢いる。異国で差別に遭いながらも孤児に分け隔てない愛情を注ぎ続けた田内さんの人間愛は、色あせることなく両国の市民の間で語り継がれていくに違いない。

その功績をしのびながら、子どもたちを社会全体で支えることの大切さをあらためて考えたい。(高知新聞)